

名古屋大学における日韓共同理工系学部留学生の日本語能力の伸び

—日本語診断試験と修了試験を通して見た推移—

名古屋大学留学生センター

村上京子

要旨

名古屋大学では、日韓理工系学部留学生に対し、「日韓理工系学部予備教育日本語試験」を作成し、診断的評価および総括的評価として用いている。そのため、指導実施前（10月）と修了時（2月）の2回、同じ試験を1期生から毎期同じ条件で行っている。この試験結果を通して9年間を振り返り、本学で行われているこのコースの成果と問題点を分析する。

キーワード

日韓共同理工系学部留学生、日本語診断試験、修了試験、日本語能力

目次

1. 日韓共同理工系学部留学生プログラムの目標
2. カリキュラムと教材
3. 各期の学習者の受け入れ状況
4. 試験の構成と信頼性
5. 受け入れ時の試験結果
6. 修了時の試験結果
7. 考察と今後の課題

1. 日韓共同理工系学部留学生プログラムの目標

日韓共同理工系学部留学生プログラムは、日本と韓国政府の共同宣言（1998年10月8日）に基づき始まったもので、日韓の文化交流を進める一環として行われている。日本への留学生受け入れ事業は2000年度からス

タートし、名古屋大学でも1期生から継続的に本プログラム生を受け入れ、2008年度10月に9期生を迎えた。

このプログラムに参加する学生は、韓国の高卒卒業予定者から前年度の秋に選抜され、文科省が実施する面接試験等によって日本における配置大学が決められる。日韓両国の出資による奨学金を得て、まず半年間を韓国の慶熙大学国際教育院で日本語と理系科目、英語の教育が、次の半年間を各受け入れ大学で日本語や専門基礎科目に関する予備教育が行われる。翌年4月からは一般の日本人学生とともに、各大学の理工系学部（主に工学部）で学ぶことになっている。

したがって、10月から3月までの日韓共同理工系学部留学生プログラム名古屋大学予備教育コース（以下、日韓コース¹）では、工学部に入学後、勉強や生活に支障のないように、日本語運用および専門基礎能力を養成するために行われる。留学生センターでは、日本語教育および日本事情教育を担当し、工学部で数学・化学・物理の専門基礎科目の教育が行われる。留学生センターと工学部のそれぞれのコーディネータ教員や事務担当者が連絡を取り合いながら、コースを運営していく。受け入れに際し、毎年留学生センター長が議長を務める日韓コース受け入れワーキンググループ会議が開かれ、緊密な連携を図っていくための調整が行われる。

留学生センターが担当する日本語教育は、日常生活に必要なコミュニケーション能力を向上させるとともに、大学生活の中で必要とされる科学読み物を読む・レポートを書く・講義形式のまとまりのある話を聴く・ディスカッションをする等の能力を養うこと目標として行われる。日本事情教育に関しては、教養科目、日

¹ 名古屋大学では日本語研修生として受け入れるが、日本語研修コースの他の国費大学院研究留学生とは日本語習得レベル、学習ニーズ・目的、年齢等が異なるため、別コースとして扱っている。

表1. 時間割とスケジュール (2008年度)

	1限 8:45-10:15	2限 10:30-12:00	3限 13:00-14:30	4限 14:45-16:15
月	作文	教養科目 (留学生と日本)	専門科目	聴解
火	会話・練習	聴解	専門科目	
水	会話・練習	工学概論 NUPACE	聴解	応用会話
木	文法	会話・練習	専門科目	読解
金	漢字・語彙	日本事情	OL作文	OL聴解

〈2008年度日程〉

10月6日(月) 日本語診断試験
 10月7日(火) 日本語オリエンテーション
 10月10日(金) 開講式
 10月14日(火) 授業開始
 10月29日(水) バス旅行
 12月22日(月)～1月9日(金) 冬休み
 2月2日(月) 工学部入試のため休講
 2月26日(木) レポート発表会
 2月27日(金) 修了試験
 3月2日(月) 閉講式

本事情の授業を通じて日本文化に対する理解を深めることが目的とされる。

2. カリキュラムと教材

本コースの学習者は10月の渡日から2月までの間、基本的に表1のような時間割で授業が行われる。日本語の授業は週13コマであるが、そのうちOLと記した2コマはコンピュータを用いたオンラインの略である。授業期間は17～18週間であるが、毎年、授業に先立ち日本語診断試験が行われる。

これは、渡日した学習者の日本語習得状況を把握することを目的としている。学習前に行われる日本語診断試験と同様の試験が修了時の2月末に名古屋大学における6ヵ月間の学習成果を測ることを目的に実施される。本稿は、この2回の試験結果をもとに報告を行うものであるが、まずカリキュラムの内容について簡単に述べてから試験結果を分析していきたい。

開講式の前後に生活オリエンテーションなど各種説明会が行われ、日本語学習に関してもガイダンスおよび担当教師の紹介などが行われる。各授業の説明は授業の中で詳しくオリエンテーションがあるが、事前に授業の流れ、基本的時間割と修了までのスケジュールについて説明し、下記のテキストを渡し、授業前に目を通してくるよう指示している。

〈基本テキスト〉

会話：「現代日本語コース中級Ⅰ、Ⅱ」名古屋大学出版会 CD版

聴解：「現代日本語コース中級Web聴解Ⅰ、Ⅱ」CD、Web版

読解：「大学・大学院 留学生の日本語 読解編」ア

ルク

作文：「留学生のための理論的な文章の書き方」スリーエーネットワーク

漢字：「KANJI IN CONTEXT 中・上級学習者のための漢字と語彙」The Japan Times

それぞれ週に3回ある会話・練習および聴解の授業では担当教師が連携して、連続的な授業を実施している。ほぼ2週間で3課が終わり、3課ごとに「話すテスト」と筆記試験が行われる。会話の基本テキストが機能シラバスで構成されているため、「話すテスト」では、その試験範囲にあたる機能の中から、ロールプレイなどの形で口頭運用能力を測る。筆記試験では、聴解、文法、表現などが測られる。いずれも、テストの当日または翌日にはフィードバックが行われ、未習得の部分についてアドバイス等が与えられる。

日本語の授業は、会話・聴解を中心に、「作文」・「読解」・「文法」・「語彙・漢字」が毎週1コマずつあり、このほか工学部の授業見学など教室外の活動などを行う「応用会話」の授業が組み込まれている。

日本語の授業のほかに「専門科目」は「数学」「化学」「物理」の工学部で行われる授業や、教養教育で留学生センターが開講している「留学生と日本」、工学部で英語によって開講されている「工学概論」、そして本コースのために開講される「日本事情」の授業がある。

本学が開発した中級日本語聴解教材はWeb上でも公開されているが、インターネットにつながなくても学習できるように各学習者にCD版を渡し、自宅または大学のコンピュータで学習できるようにしている。また、授業の聴解の時間のほかに金曜日に「オンライン(OL)聴解」の時間を設け、各自自律的にコンピュータで課題を遂行し、問題があれば教師に直接聞けるよ

うに、毎時間教師がついて指導を行っている。「オンライン(OL)作文」も名古屋大学留学生センターが開発したもので、14課から成る課題ごとに、600字程度の文章を読み、質問に答えた上で、作文を書くことが求められる。質問部分の解答は自動採点されるが、作文に関しては教師が観点別に採点し、フィードバックしている。

以上がコースの概略であるが、この約18週の教育の成果に関して、コースの前後に行われる試験の結果から見ていきたい。

3. 各期の学習者の受け入れ時の状況

2000年度から2008年度までの間に、名古屋大学が受け入れた本プログラム生は、表2、図1の通りである。

1期生受け入れの2000年から2008年度までのこの間、多少の変動はあるが、平均5名の学習者を受け入れている。3期生の中の1名が進路変更のため途中帰国したが、それ以外は9期生までの44名全員が無事この

表2. 受け入れ学習者数

期	人数
1期	5 (2)
2期	5 (1)
3期	4
4期	5
5期	4
6期	6
7期	5
8期	5 (1)
9期	6
計	45 (4)

() 内は女子

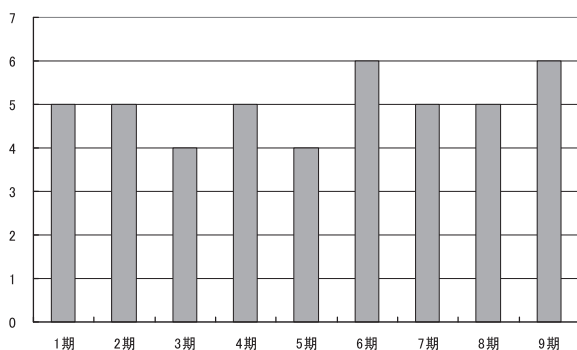


図1. 受け入れ学習者数の動向 (人)

コースを修了し、5期生までが学部を卒業している。

4. 試験の構成と信頼性

名古屋大学日韓理工系学部予備教育のための日本語診断試験は、1期生が来日する2000年に作成された。その構成は、表3のようになっている。全125問中、聴解問題は各問1点20問で、20点満点、漢字問題は、漢字を読む問題20問、書く問題25問で、各0.5点の配点で合計22.5点満点、語彙問題は15問と10問から成る問題形式が異なる問題2題の合計が25点満点、文法問題20問20点満点、読解問題は3題の問題に分かれているが合計で25点満点となっている。図2に示すように、全体に占める各問題の割合はほぼ等しくなっている。

これまで44名²に実施した診断テストの結果から、得られた本試験の信頼性係数(α係数)は、0.88であった。

各問題項目の正答率・識別度は表4の通りである。

診断試験と同時に修了試験としても用いるという性

表3. 試験の構成

		問題数	満点
1	聴解	20	20
2	漢(読)	20	10
3	漢(書)	25	12.5
4	語彙	15	15
5	語彙	10	10
6	文法	20	20
7	短文読解	5	5
8	読解	10	10
9	読解	10	10
			112.5

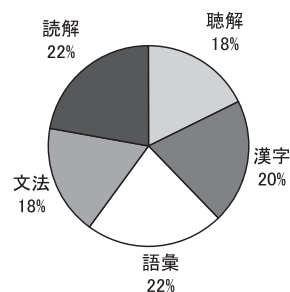


図2. 各下位問題の割合

² 診断試験は、9期生6名のうち1名欠席であったため、5名の結果を用いた。

格上、コース開始前の診断テストの正答率は全体に低い。特に漢字を書く問題では、0.11と非常に低いレベルにある。これはほかの項目が4肢選択形式であるのに対し、漢字問題のみが実際に書いた文字を採点する再生問題であることにもよるが、漢字の習得が実際遅いことも考えられる。テストの識別力はすべて0.35以上で、できる学習者とそうでない学習者を見分ける十分な力を持っているテストだといえる。「短文読解」問題が識別力0.39とやや低めではあるが、これは問題数が5問という少数であるためだと考えられる。

5. 受け入れ時の試験結果

各期の受け入れ時点における診断テストの学習者平均結果を図3に示す。どの期も聴解試験の結果は高いが、反対に漢字の読み・書きが非常に低いことがわかる。全体に3期から5期にやや落ち込み傾向が見られるが、各期の学習者数が少ないため、1人、2人の学習者の成績が平均に大きく反映しているためである。

表4. 診断試験の正答率と識別力

問題項目	正答率	識別力
聴解	0.61	0.74
漢字(読)	0.26	0.81
漢字(書)	0.11	0.70
語彙1	0.45	0.68
語彙2	0.59	0.78
文法	0.46	0.84
短文読解	0.43	0.39
読解1	0.51	0.71
読解2	0.31	0.53

次の図4から図9までをみると、個人差が大きいことがわかる。棒グラフは各期の学習者一人ひとりの得点で、折れ線グラフは、その期の平均を示す。

図4は横軸に1期から9期までの学習者個人の聴解の成績を示している。受け入れ時には非常に個人差が大きいことが見て取れる。聴解20点満点のうちの18点以上を取る学習者がいる一方で、10点以下の学習者が2人以上いるときもあり、6期7期はたまたまそのような学習者がいなかったため平均点が高くなっていることがわかる。したがって、図3に見られる期毎の変動は、個人差の大きい学習者の組み合わせにより生じたものと思われる。

図5は漢字の読みの問題に関する、個人の得点を表している。これを見ると、全体的に低調であるが、毎期1名漢字の比較的得意な学習者がいて、その点が平均を引き上げていることがわかる。3期と5期には全く得点がなかった学習者が含まれていたが、7期以降少し伸びてきている。これは、韓国側の予備教育機関である慶熙大学国際教育院にも本コースの学習者たちの弱点として文字(漢字)の問題が伝えられ、教育に力を入れてきている現われだと考えられる。

漢字の読みに関しては少しずつ伸びてきているが、漢字を書くほうは、図6の通りかなり弱いことが見てとれる。平均点も満点の1割程度で、大学入学までに漢字の力を伸ばすことが大きな課題であることがわかる。大学で単位を取得していくためには、テキストなどを早く多く読むことと同時に、テストなどで短時間に考えをまとめて書くことも必要である。その際、漢字の読み書きは非常に重要になってくる。この診断試

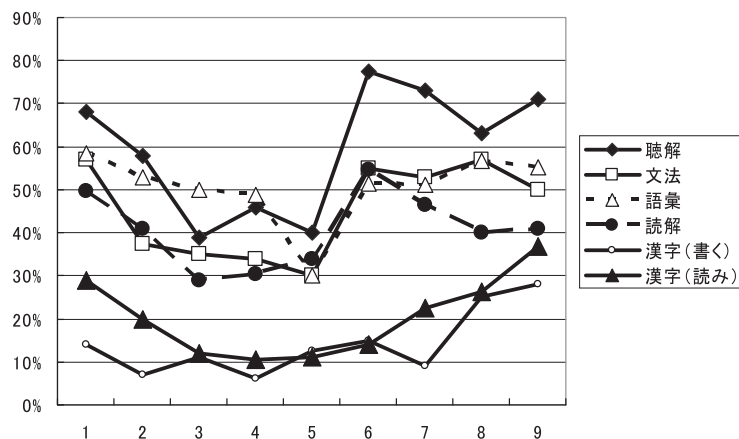


図3. 受け入れ時の学習者平均

験の結果から、1期生から漢字教育を中心とした「漢字・語彙」の授業を組み込むことにした。

図7のように、語彙に関しては5期を除いて50%以上の平均を維持しており、かなり高いレベルの学習者も見られる。他の問題と同様各期の学習者間の個人差は大きく、5期も2名を除けばほぼほかの期と変りはない。5期の2名は漢字の読みでも得点がなく、文字が読めないために語彙の問題でも得点が低かった可能性がある。

文法に関しては、図8のように20満点中10点以下の学習者が毎期のようにいる。しかし、6期以降全体的に向上してきている。

図9のように、読解も個人差が非常に大きく、このばらつきのある学習者のうち、特に低い学習者を翌年4月の入学までにひきあげることが、予備教育としては必要である。また5名という少人数のコースであることから、1クラスで対応せざるを得ず、レベルの高い学習者の学習意欲を削ぐことなく、きめの細かい指導

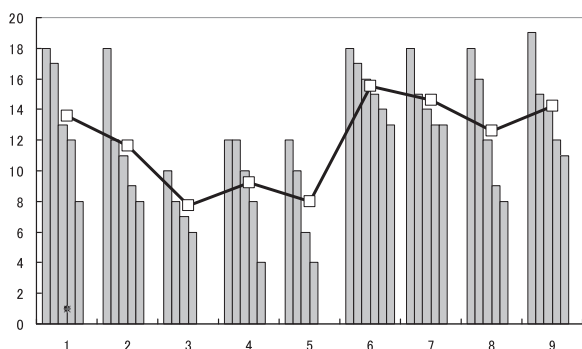


図4. 受け入れ時の聴解 (20点満点)

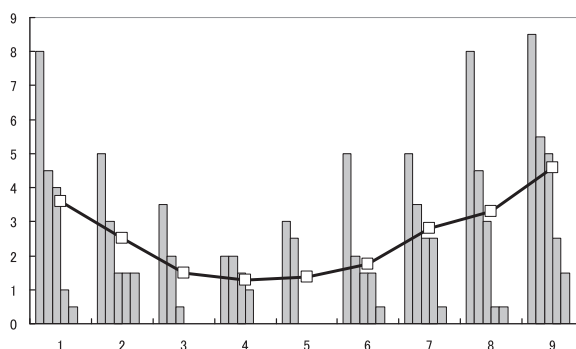


図5. 受け入れ時の漢字 (読み) (10点満点)

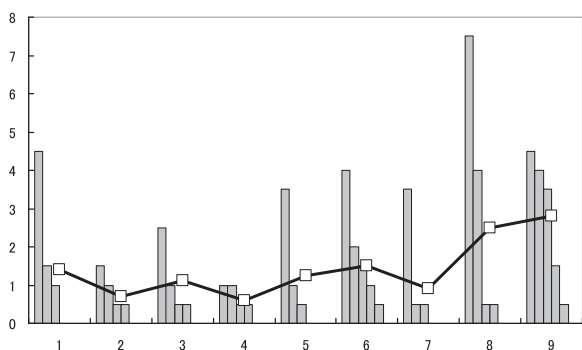


図6. 受け入れ時の漢字 (書く)

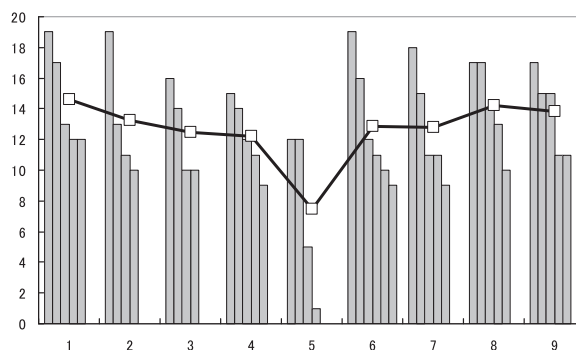


図7. 受け入れ時の語彙

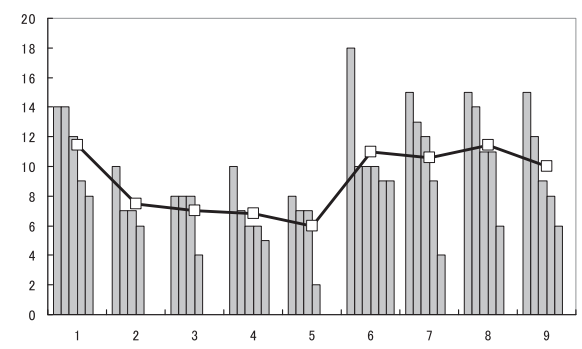


図8. 受け入れ時の文法

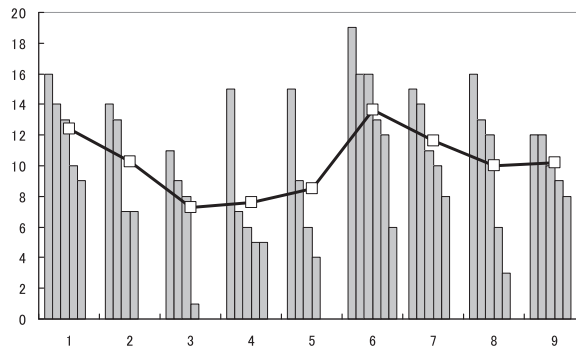


図9. 受け入れ時の読解

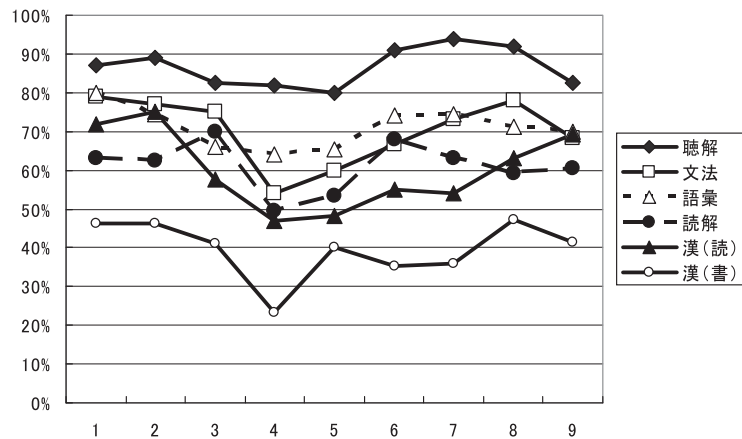


図10. 修了時の学習者平均

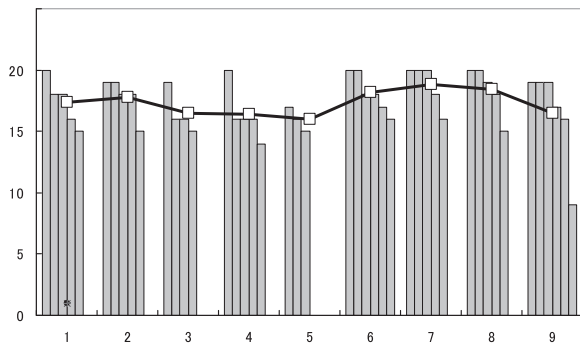


図11. 修了時の聴解

を行うことが求められる。韓国の高卒業後同じ教育機関で学習してきたという、同じ背景をもつ学習者たちであることのメリットを最大限生かし、できるだけ協働作業をしていく中で各自の力を伸ばしていくことに努めた。いたずらに競争させることがないように心がけて指導していくよう、授業を担当する者同士確認した。

以上の受け入れ時の成績が5ヶ月後の修了時にはどうなったか、次に述べる。

6. 修了時の試験結果

図10の修了時の成績を図3と比較すると、受け入れ時にはほとんどの問題に関してどの期も60%以下であったのが、漢字の「書き」を除き、60%を越える期が多くなっている。また、受け入れ時の成績に比べ、3, 4, 5期の落ち込みはあまりなくなっていることがわかる。

各問題別に見ても、同様の傾向が見て取れる。図11は修了時の聴解問題の成績であるが、これを受け入れ時の学習者の成績を示した図4と比較すると、個人差が縮まり、ほとんどの学習者が満点の20点に全員近づいていることがわかる。修了時には3期から5期までの落ち込みもなくなっている。

聴解以外の問題についても、同様に修了時には全体に得点が高く、期や個人による違いも解消してきている。

次に学習者個人がどのように伸びたかを図12に全問題一括して示す。図12は、横軸に受け入れ時（コース前）の成績を取り、縦軸は修了時の成績を示している。1期から9期までの全学習者44名をそれぞれ1つの点で表し、各学習者がコース開始時（横軸）の得点より修了時（縦軸）で伸びていれば、対角線より上にプロットされる。

漢字の「読む」「書く」を除き、点のちらばりが横軸方向（受け入れ時）より、縦軸方向（修了時）のほうに縮まっていることがわかる。すなわち、受け入れ時には大きかった個人差が、修了時にはなくなっていることを示す。特にはじめ低い得点であった学習者の伸びが大きいことが見て取れる。

しかし、漢字に関しては、丸で困んだような修了時になっても伸びていない学習者の存在が問題である。漢字問題は、次に示すようなものであった。これらの漢字の読み書きは学部入学後、教科書や講義の中で出てくるようなレベルのものを選んである。

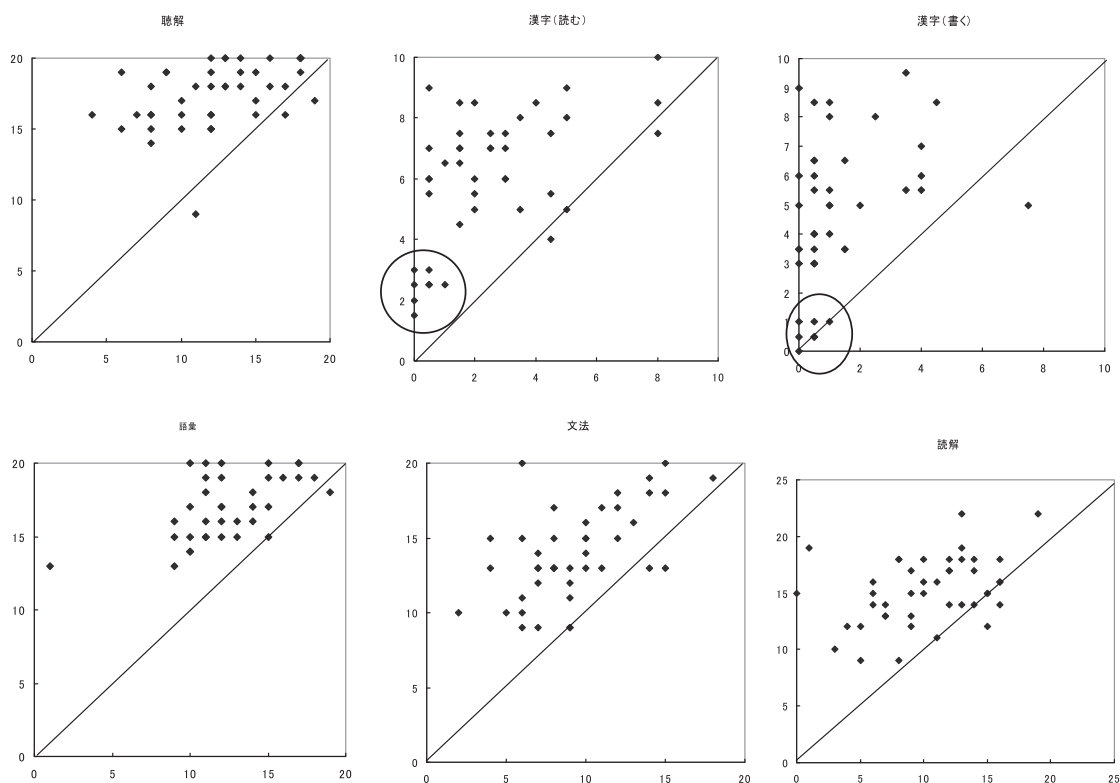


図12. 受け入れ時と修了時比較

【漢字の読みを問う問題例】

次の漢字の下線の部分の読み方をひらがなで書きなさい。

自動車騒音の実態調査の結果が発表された。朝・昼・夕・夜の四つの時間帯でそれぞれ調べると、全国幹線道路沿い4,179か所の測定点のうち、環境基準以下のところが14.5%、基準を超過しているところが49.7%で、まだ目標を達成するにはほど遠い。

【漢字の書きを問う問題例】

次の下線の部分を漢字で書きなさい。

最近、病気のよほうとしゅみをかねて、せっきょく的に歩こうという人が多い。実際、こうかが上がっているというほうこくもある。ジョギングのように走るのとひかくすると、ひざへのふたんは大幅にけいげんされるという。

大学入学後、必要に迫られて漢字の読み書きは大幅に改善されることが予想されるが、ある程度の基礎が必要である。そのためにも修了時には、これらの漢字の少なくとも50%は読み書きできるようにしておきたい。しかし、これまで数人の学習者は非常に低いレベルにとどまったまま修了したことがわかる。

7. 考察と今後の課題

下の表5、図13に示すように、10月の受け入れ時点に比較し、修了時の成績の伸びは大きい。受け入れ時にはすべての問題で60%に届いていなかったが、修了時は漢字を除き、合格ラインの60%を超えている。特に聴解は26%の伸びを示している。漢字の得点の伸び

表5. 受け入れ時と修了時の正答率とその差

	10月	2月	伸び
聴解	59%	85%	26%
漢字	17%	48%	31%
語彙	51%	70%	19%
文法	46%	69%	23%
読解	41%	60%	19%

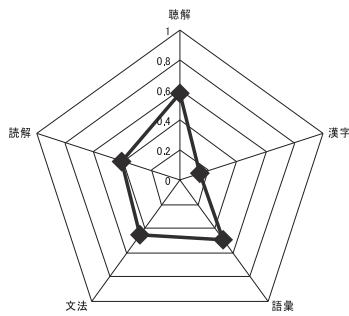


図13. 受け入れ時の平均

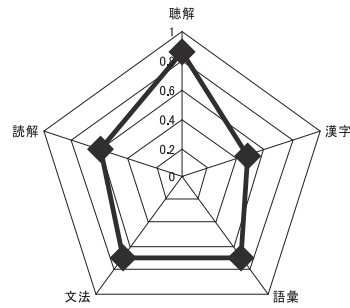


図14. 修了時の平均

も大きく31%となっているが、これは受け入れ時の得点が、ほかに比べ漢字の力がひときわ低かったため、図13では漢字の部分が大きく落ち込んでいる。それが、図14では次第にバランスが取れるようになってきている。しかし、得点の満点に対する割合で見るとまだ48%で合格ラインの60%には届かない。

以上からまとめると、每期、ほぼ同レベルの優秀な学生を受け入れているといえる。一時期やや未習得の部分の多い学習者を複数受け入れたが、修了時には大きな伸びを見せ、受け入れ時のような学習者間の大きな差はなくなっている。これは各学習者の能力の高さにもよるが、母語の韓国語と日本語の距離に近さに加え、5、6人という少人数教育が可能のため、きめの細かいカリキュラム作りが行え、その18週のカリキュラムが適切であったことによると考えられる。修了時の成績はほぼ每期同程度で、漢字以外は到達目標に達している。卒業時には全員無事に単位取得し、大学院等へ進学しており、現在のところ、特に問題は起こっていない。

しかし、問題がないわけではない。漢字の教育改善が必要である。これまでは週1コマ「漢字・語彙」の授業でテキストに沿って、説明・練習・確認テストが繰り返されてきた。しかし、それでは十分使いこなせるようにはならない。他の授業でも積極的に漢字を読む・書くような指導を取り入れていくようにしたい。2007年度から授業外の時間にオンライン漢字コースを受講させるようにした。これは留学生センターが全学の留学生向けに開講しているコースで、漢字の読み書きに関して多くの問題が用意されている。各自の都合のよい時間にアクセスでき、すぐにフィードバックが得られるため、学習者からはゲーム感覚で学習できると好評である。またオンライン読解・作文コースでも、

漢字部分に注意させ、特に作文の漢字の間違いは下線を引くことで注意を促し、自分で辞書などを使って再度確かめて入力するようにさせている。学部に入学後は、レポート作成等はコンピュータを用いてなされ、手書きで正しい漢字が書けなくともすむが、テストなど手書きしなければならぬものも多い。短時間で多くの量の資料を読むことも求められるため、漢字に関する教育はさらに力をいれていきたい。

日韓コース修了生が、学部入学後、勉学や生活の中で十分な日本語運用能力を身につけているかどうか確認するために、本コース担当の日本語教師が学部入学後も引き続き学部の授業を担当している。学部1年の留学生が受講する全学教育言語文化科目では、中国などから来た私費留学生と同じクラスで日本語の授業を受けている。日韓コースからきた学生以外はみな日本留学試験を受けて入学してきた学生である。工学部の私費留学生クラスは口頭表現クラスと、文章表現クラスが毎週1コマずつあるが、本コース修了生はともにまったく問題なく、レポート作成・発表、ディスカッション等をこなしている。学部1年の前期が終了した時点で、Can-do-statementsおよびアンケートを每期実施している。まだ自分の意思を十分に伝えるだけの語彙・表現が身につけていないという不満はあるものの、講義を聞く、文献を読むなど勉学上特段の困難はないと回答している。特に日韓コースの最後に行うレポート作成・発表が実際に学部に入学してからレポートを書いたり、発表をしたりする際の自信につながっているという意見を多くもらっている。

今後、さらに本コース受講生から要望の出ている日本人学生やほかの国の留学生との交流の機会を増やすことや、より読みごたえのある興味のある文章を多く読むことなどを取り入れていきたい。